

# ランボー・ド・ヴァケイラと第四次十字軍（改訂）

## Raimbaut de Vaqueiras et la Quatrième Croisade (revision)

（1989年4月7日受理）

杉 富士雄  
Fujio SUGI

**Key words:** ランボー・ド・ヴァケイラ, 第四次十字軍

### は じ め に

この小文は、1980年岡山大学文学部紀要（第一号）に掲載された論文に手を加えて1988年9月地中海学会（倉敷会場）で特別講演したものに基づいて書き改めた。

フランス・ロマン派の画家ユージェヌ・ドラクロワ<sup>1)</sup>に『十字軍のコンスタンチノーブル入城<sup>2)</sup>』と題する大作がある。1841年のサロンに出品された傑作の評判の高いこの絵画は、時のフランス国王ルイ・フィリップがヴェルサイユ宮殿を飾るために、ドラクロワに作成を依頼したものである。

絵のテーマは、十字軍によって陥落されたビザンツ帝国の絢爛豪華な首都コンスタンチノーブル（現在のイスタンブール）が、十字軍によって攻略され、フランドル伯ボードゥワン九世<sup>3)</sup>が威風堂々と入城する情景である。赫々たる勝利に酔い痴れる十字軍の周囲に展開するものは、炎上するビザンツ帝国の無残な光景であつた。

詩人ボードレールは「この絵は本質的にシェクスピア的な美しさを備えている。シェクスピア以後に、ドラマと夢想とをこれほど神秘的な統一のもとに融合したものは、彼を描いてほかにはない<sup>4)</sup>」と称賛を惜しなかった。

十字軍がコンスタンチノーブルに入城して、放火・略奪をほしいままにしたのは、十字軍本来の目的を逸脱した悪名の高い第四次十字軍のさなかであつた。この十字軍は、時のローマ法王インノケンティウス三世<sup>5)</sup>の宣布によって起されたにもかかわらず、法王自身によってある時には破門され、また他の時には祝福されたのである。そして結果的には、こんにち法王庁の公式記録から抹削されたこの十字軍が、皮肉なことにも、文学史上きわめて実り豊かな東方遠征ということになるのである。

それは、13世紀にヨーロッパ諸国に先がけて開花したフランス文学の担い手となる文人・作家たちが多数十字軍に参加したためである。たとえば、北フランスの出身者には、年代記作者のジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥワン<sup>6)</sup>、ロベール・ド・クラリ<sup>7)</sup>、アンリ・ド・ヴァランシェンヌ<sup>8)</sup>、恋愛詩人コノン・ド・ベテューヌ<sup>9)</sup>、シャトラン・ド・クーシー<sup>10)</sup>、ユーグ・ド・ベルゼ<sup>11)</sup>などがいた。また南フランス出身者には恋愛詩人のランボー・ド・ヴァケイラ<sup>12)</sup>、ペイル・ヴィダル<sup>13)</sup>、ゴセルム・フェディなどがいたのである。

南フランスでは、およそ12・3世紀ころにオック語と呼ばれる北仏語とはかなり異った俗語を用いる叙情詩人トゥルバドゥールの文学の最盛期であつた。この文学は、南フランスの封建領主の宮廷を中心に栄えた、女性崇拜を基調とする恋愛至上主義の優麗典雅な叙情詩の文学であつた。

この南仏文学も、第四次十字軍に引き続いて、法王インノケンティウス三世によって起された、南西

フランスの異端アルビ派討伐十字軍によって壊滅的な打撃を受け、急速に衰退するのである。しかし南仏文学が、北フランス、イギリス、ドイツ、スペイン、イタリアなどに受けつがれて、それぞれの国の国民文学醸成に大きな推進力となったことは周知のところである。

南仏文学がヨーロッパ諸国に及ぼした影響は、アルビ派討伐十字軍以前からも、すでに著しいものがあった。これは、各国に文芸を愛好する領主が少なくなかったからである。とりわけ詩人たちは好んで北イタリアへ出向いたのであるが、それは、次のような理由が考えられる。南フランスと北イタリアとが、古来陸路のみならず、古代ローマ人が豪語した「われらが海」、すなわち地中海沿岸の航行によって密接な関係を結んでいた。8・9世紀ころ猖獗をきわめたサラセン人の南フランス侵寇が、12・3世紀には鎮静したため、南フランスと北イタリア間の航行が頻度を増し、詩人たちもイタリアへ容易に旅することができるようになった。南仏語とイタリア語とが言語的にきわめて近かったため、南仏文学がイタリアで容易に理解され、好んで鑑賞された。しかも当時イタリアには、いまだダンテやペトラルカのように俗語を用いるすぐれた詩人や文人の出現を見なかったため、イタリアの多くの宮廷で南仏文学はことのほかに愛好されていた。こうした理由から、南フランスの詩人たちは、かなり早い時期から、南フランスで有力なトゥールーズ伯やプロヴァンス伯たちの宮廷をあとに、はるばる北イタリアのエステ公やモンフェラット侯などの宮廷に赴いたのである。

これらの詩人のうちには、ペイル・ヴィダルのように一風変わった者もいた。彼は神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ一世（<sup>あかりげ</sup>赤髯王）の宮廷に迎えられたのであるが、彼の言い分によれば、「犬の啼き声」に似たドイツ語に僻易し、「陽気なロンバルディア人」に心が引かれるままにアルプスを越えて、イタリアを訪れている。

詩人ランボー・ド・ヴァケイラの場合は事情を異にしている。彼はイタリアを愛する以上にモンフェラット侯ボニファッチョ<sup>14)</sup>の人柄に魅せられて、後半生を侯のかたわらで過ごし、ついには侯と共に東方の戦場の露と消えるのである。

冒頭に挙げた南仏の詩人たちは、いずれも恋愛詩人として身を起こして南フランスの宮廷を渉り歩くのであるが、それぞれの理由<sup>わけ</sup>あって十字軍士として旅立ったが、本人の意志のいかんにかかわらず、コンスタンチノーブル攻略戦に参加することになるのである。

これらの詩人のうち、ランボー・ド・ヴァケイラが最も傑出した詩人であった。彼は第四次十字軍の総帥モンフェラット侯側近の騎士として従軍し、その間に体験したことを題材に、四編の叙事詩と、他に類例を見ないジャンルの三部作から成る書簡詩を書き残したのである。

小論は、ランボー・ド・ヴァケイラの作成した書簡詩を、十字軍をテーマとするこれら四編の叙情詩によって補足しながら、詩人ランボーの赤裸々な人間像を再現しようとするものである。

詩人ランボーは1152年ころ、アヴィニョン北東に聳えるヴァントゥー山の麓ヴァケイラに生まれた。今日この地で作られる豊醇なワインを「吟遊詩人のワイン」と呼んでいる。故なしのしないのである。

13世紀の南フランス出身の伝記作者によれば、詩人の父は「ヴァケイラ城に出仕していたプロヴァンスの貧しい騎士で、その名をペイロールといい、気の触れた男だった」<sup>15)</sup>。しかし詩人の父が精神異常者であったかどうかは詳らかにされていない。今日明らかにされていることは、彼はオランジュ公の所有するヴァケイラ城で働く身分の低い召使いであったというくらいのことである。

ランボー・ド・ヴァケイラは詩人として早くから頭角を現わし、オランジュ公ベルトラン・デ・<sup>16)</sup>ボアの宮廷をはじめ、南仏各地の宮廷はもちろん、北イタリアのマラスピナ伯アルベルト<sup>17)</sup>やモンフェ

ラット侯ボニファッチョの宮廷でも活躍した。とくに彼は北イタリアのピエモンテ辺境伯として権勢並びなきモンフェラット侯のお気に入りの宮廷詩人として、厚遇されたのである。

モンフェラット家というのは、代々北イタリアのロンバルディア地方の名門で、12世紀にはポー河とスクリヴィア川の間広がる地域を領有して四囲を睥睨していた。詩人ランボーの主君ボニファッチョの父グリエルモ三世は、1147年の第二次十字軍の指揮官の一人として出陣してめざましい活躍をし、一家の名声を大いに高めた。このグリエルモ三世には四人の息子がおり、かれらはいずれも東方において絶大な権力を持っていたが、ボニファッチョを除いて三人とも、東方で不慮の死を遂げたのである。

詩人ランボーの主君モンフェラット侯ボニファッチョは、グリエルモ三世の三男として、1152年ころモンフェラットに生まれた。彼の長兄グリエルモに続いて次男のコンラッドが死亡したため、1192年モンフェラット侯爵家を相続した。彼は文武両道の達人で、詩人ランボーよりも一・二歳年上であった。詩人がはじめて彼のもとを訪れた時、二人とも20代の若さであったと思われる。

ランボーは侯のお気に入りの宮廷詩人であったが、騎士の称号が与えられた。詩人は書簡詩の冒頭の部分で、次のように歌っている。

「殿は私に存分の祿を授け、武具を揃え、ねんごろにもてなし、低い身分から高い身分に昇進させ、平民から尊敬される騎士に仕立てて下さった」<sup>18)</sup>

事実詩人は、イタリア北西部の自由都市アスティとの戦闘や、シチリア遠征に従軍している。そしてアスティ近郊のクワルトで、「400人もの騎兵が殿を目がけて襲いかかってきた」とき、「手勢10人ほどで撃退した」<sup>19)</sup>と誇らしげに語っている。

また、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ六世がシチリアに従軍した1194年、皇帝はイタリアにおける皇帝派代表であり、姻戚関係のあるモンフェラット侯に協力を求めた。このとき詩人ランボーはシチリア遠征軍に参加しているが、その年の12月、皇帝がパレルモでシチリア王として戴冠式を挙行政した際、ランボーは騎士の称号を得たものと思われる。

それから4年後の1198年、法王に就任したばかりのインノケンティウス三世は、第四次十字軍を起こし、さらに10年後にはフランス南西部の異端アルビ派を殲滅するなど、法王権の絶頂期を築いた。

さて南フランスの詩人ランボーと第四次十字軍の係わりを考察する場合、詩人の手に成る書簡詩がヴィンチェンツォ・クレスチニの言葉にもあるように、「それが製作された時代の歴史と精神に関する資料として、すぐれた特色をそなえ、表現も出色である」<sup>19)</sup>としても、主君に宛てたいわば私信であるため、同じ詩人の作成した十字軍をテーマとする四編の叙情詩を援用することにする。しかしそれだけではまだ十分とは言えないので、主に、年代記作者ヴィルアルドゥワンの『コンスタンチノーブル征服記』によって欠落部分を補填しながら、ランボーの人間像を描くことにしたい。

ヴィルアルドゥワンはシャンパーニュ伯<sup>マレシャル</sup>の家老として十字軍の計画に参画し、終始十字軍の黒幕として活躍した武人であるが、同時に十字軍の起源からモンフェラット侯の落命までの経緯をつぶさに描いた卓越した年代記者でもあった。

1201年5月、第四次十字軍の提唱者の一人シャンパーニュ伯チボーが病気で急死した。そこでヴィルアルドゥワンの推挽もあって、北イタリアのモンフェラット侯ボニファッチョが十字軍の総帥に推戴された。侯は大いに喜んで、直ちに北フランスのソワソンへ赴いた。ランボーは書簡詩のなかで、次のように歌っている。

「殿は十字架の御印<sup>みしるし</sup>を受けに、ソワソンにおいでになりました」<sup>20)</sup>

こうしてモンフェラット侯は十字軍の総帥に就任したが、そのときランボーは、十字軍の歌のなかで、主君の総帥就任を、わがことのように喜んでいる。

「フランスとシャンパーニュの十字軍士たちは、殿を最高の人物として、殿に、イエスを祀る墳墓と十字架とを奪還するように懇請したのです」<sup>21)</sup>。

また放浪の詩人ペイル・ヴィダルも、次のように記している。

「モンフェラット侯に小詩を捧げます。まことに立派なお方をお選びしたものです」<sup>22)</sup>。

ところで詩人たちは、みずから好んで十字軍に参加したのであろうか。ランボーは当時すでに騎士であったはずであるが、彼は主君に隨行してソワソンへ赴いた形跡はない。しかも彼の十字軍の歌には、明らかに矛盾する個所が見られるのである。

「もし神さまのお気に召すならばこの地に留まって汚名を流すよりは、若くてもよい。かの地で死にたいものだ」<sup>23)</sup>。

「私は殿のために十字架の御印を受けるべきなのか、それとも控えるべきなのか分からない。またかの地へ発つべきなのか、それとも留まるべきなのかも分からない」<sup>24)</sup>。

このような詩人の心の動搖は、ランボーひとりに限ったものではなかった。彼と同じように十字軍に参加した南フランスの詩人ゴスレム・フェディは、東方へ出発する直前、恋人を思っ、こう歌っている。

「まことの神イエス・キリストさま、今こそ私をお導き下さい。私は良い女と別れるのです。そのため夜に日をついで憂い、溜め息をついているのです」<sup>25)</sup>。

また北フランスの恋愛詩人コノン・ド・ベテューヌは、第三次十字軍（1189-1192）にも参加した兵<sup>つわもの</sup>であり、また第四次十字軍ではラテン帝国の建設に際して式部長官に任命されたほど目ざましい功績を挙げた人物であったが、いざ東方へ出発するとなると二の足を踏んで、次のように歌っている。

「私は彼女に恋い焦れつつシリアへ向かうのです。主のおんためとあれば、なにびとも拒むことはできないのですが」<sup>26)</sup>。

要するに詩人たちは十字軍士を激励する歌を数多く作成したが、それは、たいていの場合他の人を励ますものであって、かならずしもみずからの身を律するものではなかったのである。

したがって南フランスの詩人のうち20人上の者が十字軍の歌を作成しているが、<sup>27)</sup> 実際に十字軍に参加したものは、第四次十字軍に関するかぎり、ランボー・ド・ヴァケイラとゴスレム・フェディとギロー・ド・ボルネユの三人くらいだろうと思われる。

さてモンフェラット侯が十字軍総帥に選ばれた翌日、ヴィルアルドゥワンによれば、人びとはそれぞれ「いとまを告げて国もとに帰り、用意万端整えてヴェネチアで再会することを約束した」<sup>28)</sup> のである。ところがモンフェラット侯はイタリアへ帰るところか、ドイツ帝国のフィリップ皇帝<sup>29)</sup>を訪れた。二人は姻戚関係にあったが、ただそれだけの理由で、十字軍総帥に選ばれた彼が国もとに帰るのをなぜ延期したのか、はなはだ理解に苦しむところである。なにか下心があったように思われてならない。なぜなら、彼はドイツ皇帝を求めて、皇帝のもとに亡命していたビザンツ帝国皇帝イサキオス二世<sup>30)</sup>の皇子アレクシオス<sup>31)</sup>に会っているからである。この辺りの事情については、詩人ランボーはもちろんのこと、年代記作者ヴィルアルドゥワンも触れていないのである。

当時ビザンツ帝国では、帝位の篡奪が絶えなかった。優柔不断な皇帝イサキオス二世は、1095年に実弟アレクシオス（後のアレクシオス三世）<sup>32)</sup>によって帝位を奪われ、目をくりぬかれて、皇子アレクシ

オスと共に投獄された。皇子は脱獄に成功して、ドイツ皇帝フィリップのもとに亡命してきた。皇帝のきさき妃がアレクシオスの姉であったからである。

ドイツ皇帝としてモンフェラット侯と皇子アレクシオスの三人の邂逅は、第四次十字軍の進路を異常な方向へ導く導火線の一つになったことは事実のようである。溺れる者藁をもつかむ思いの皇子は、篡奪者から帝位を奪還したいばかりに、次のような垂涎おくあたわざる条件を示して、モンフェラット侯に救護を求めたのである。第一に、念願成就の暁には、ヴェネチアから出航する十字軍士の船賃は全額肩代わりして支払う。第二に十字軍援助費として20万マル提供する。第三に、エジプト遠征費を負担する。第四に、ギリシア正教会をローマ教会の支配下に置くことなどであった。

この申し出にモンフェラット侯の心は大いに動かされ、ついには聖地奪還の十字軍を利用して、ビザンツ帝国の篡奪者アレクシオス三世の追放を密約したという。侯はつい先頃、十字軍総帥に就任した際、法王インノケンティウス三世の意志に従って、十字軍をエジプト経由でエルサレムへ派遣することを公言したのであるが。

そもそも十字軍の海上輸送については、すでに1201年4月、ヴィルアルドゥワンやコノン・ド・ベチューヌ等がヴェネチアに赴いて交渉した結果、ヴィルアルドゥワンの『年代記』によれば、十字軍側はヴェネチア側に対して、十字軍士33,500人を1人当たり2マル、馬4,500頭を1頭当たり4マルの計算で輸送費85,000マルを、ヴェネチア出航前に支払うこと。戦利品は両方で山分けすることなどを条件に、ヴェネチア側が輸送に当たることが取り決められたのである。

ところが翌1202年夏、実際にヴェネチアに集結した十字軍の数は、当初の予定を大きく下まわったため、ヴェネチア共和国と契約した輸送額の半分しか支払うことができなかった。これは、ヴィルアルドゥワンの言うように、ヴェネチア人を信用しない十字軍士たちが、「ヴェネチアからの出航をひどく危ぶんで、仲間の者から離脱して、マルセイユから出航しようとした」<sup>33)</sup>ためでもあった。

とにかくヴェネチア共和国総督エンリコ・ダンドロは、理由のいかんにかかわらず、当初の契約を履行しないかぎりは、断じて船舶を出さないと主張した。そのためヴェネチアに釘付けにされた十字軍士は、いずれは聖地奪還ができるものと確信し、さしあたって、ヴェネチア側の提案を呑むことにしたのである。

ヴェネチアはアドリア海を隔てたダルマチア地方の支配をめぐって長年ハンガリア王国と敵対し関係にあったが、当時ダルマチア地方の中心都市ザダール<sup>35)</sup>はハンガリア王国が領有していた。狡猾なエンリコ・ダンドロが、ヴェネチア出航を待ち望んでいる十字軍士たちに提案した条件は、かれらがザダールを奪還してくれれば、輸送費の不足分の支払いは延期してもよいというのであった。十字軍士たちは背に腹は代えられない思いでその条件を呑み、予定より三か月遅れて、ようやく1202年10月初旬ヴェネチアを出航したのである。

ヴィルアルドゥワンによれば、同じころ十字軍総帥モンフェラット侯はヴェネチア総督ダンドロの要求する輸送費の全額の苦面につとめていたともいう。<sup>36)</sup>

このように、いくたの迂余曲折ののちに、十字軍士たちはヴェネチアを出航して、11月末にはザダールを攻略している。いかなる理由があったのか、モンフェラット侯はザダール攻略には参加しなかった。ヴィルアルドゥワンは『征服記』のなかで、「この時、すべての君侯が来ていたわけではない。モンフェラット侯は用事があって、あとに残られた」<sup>37)</sup>と記している。

南フランスの詩人ゴスレム・フェディは次のように書き留めている。

「私は主君（モンフェラット侯）をロンバルディアに残して出発します。神さま、主君にご加護を垂れたまえ。主君は私たち十字軍士のすべての心と魂の先導者なのですから」<sup>38)</sup>。

要するにモンフェラット侯は、なにかの理由があって、ヴェネチヤから一端国もとに帰ったものと思われる。

前にも触れたように、十字軍は1202年11月末にザダルを占拠したが、ローマ法王は事前にザダル占拠の計画を知り、なんどかきびしく咎めている。それにもかかわらず、法王の命令は踏みにじられ、異教徒討伐を使命とする十字軍は、ザダルで異教徒ならぬ、同じキリスト教徒の血を流したのである。そこで法王は、十字軍士全員を破門したが、エンリコ・ダンドロ等は少しも動揺の色を示さなかった。

その年の暮に、モンフェラット侯がザダルに到着した。まもなくドイツ皇帝フィリップのもとから使者が派遣されてきた。使者の伝言の主旨は、モンフェラット侯がドイツで結んだ密約を早急に履行して欲しいというものであった。モンフェラット侯とダンドロは、引きつづきドイツからやってきたビザンツ帝国の皇子アレクシオスと密約に調印したという。

モンフェラット侯とダンドロ総督は、言葉たくみに十字軍を説得し、1203年、コンスタンチノーブル攻略を目指して、ザダルを出航した。詩人ランボーはザダル攻略についても、また密約についても一切口をつぐんでいる。では、ランボーは、当時どこにいたのであろうか。彼は書簡詩に次のように記している。

「わたしはバボンの城にいたのです」<sup>39)</sup>。

この詩句の内容からすれば、主君のモンフェラット侯が先発の十字軍に合流するためにヴェネチヤを<sup>た</sup>発った1204年秋に、なぜかランボーはマルセイユに近いバボンにいたことになる。理解に苦しむことが少くない。

十字軍の主力はもちろんヴェネチヤから出航したが、マルセイユから<sup>た</sup>発った者もかなり多かった。

モンフェラット侯やダンドロ総督等がザダルで春の訪れを待っていたころ、マルセイユではブリュ<sup>40)</sup>ジュの城代ジャン・ド・ネールの率いるフランドルの船団が越冬していた。この船団は春の到来とともに、ザダルから南下するモンフェラット侯等の船団と、ペロポネソス半島南西部のメトネ<sup>41)</sup>港で合流することになるのである。詩人ランボーは、マルセイユからフランドルの船団の一員として東方へ向ったようである。かれは、マルセイユ滞在の記述のすぐあとで、次のように歌っているからである。

「殿とともにメトネの近くで戦いました」<sup>42)</sup>。

メトネの戦闘がどんなものであったかは、年代記作者がヴィルアルドゥワンも触れておらず、詳細については不明である。

いよいよコンスタンチノーブル攻略ということになる。

詳しい歴史は他に譲ることとして、ここでは、ランボーの書簡詩と叙情詩を中心に、二度にわたるコンスタンチノーブル攻略戦の模様を概観したい。

詩人はまず書簡詩で、次のように述べている。

「わたしは本丸のそばに陣取っていましたが…この皇帝は兄を裏切り、殺害したのです」<sup>43)</sup>。

この詩で本丸というのは、ブラケルナエ宮殿のことである。ヘラクリウス城壁に接し、金角湾に近い町の北西部に位置するこの宮殿は、6世紀に建造されたという。十字軍が首都を包囲したとき、主力はこの宮殿近くに布陣したのである。

兄を裏切った皇帝というのは、もちろん篡奪者アレクシオス三世のことである。皇帝は、1203年7月

11日に開始されたダンドロ総督の率いるヴェネチア陸戦隊のたくみな攻撃に、ほとほと手を焼いた。そのうえ、7月17日に起った首都の火災によって、皇帝軍はすっかり戦意を喪失してしまったのである。

なお、先の引用文に見るように、皇帝は兄を裏切り、殺害したというのは、事実と反しているようである。皇帝の兄イサキオス二世は、後述するように、皇子アレクシオス四世が篡奪者ムルツプロスに捕えられたという知らせを受けると、絶望の余り病いを得て死んだと伝えられるからである。

皇帝アレクシオス三世は、首都が大火に包まれている以上、もう勝算はないものと諦めて逃げを打った。書簡詩には、次のように記されている。

「すると皇帝はすっかり怖じ気づき…ひそかに逃亡し、あとにはブーコレオン宮殿と見目うるわしい皇女が残されたのです」。<sup>44)</sup>

皇帝アレクシオス三世は、城内に攻めこんできた十字軍を、はじめは威嚇し、ついで決戦をいどもうとした。しかし後続する十字軍士が破竹の勢いで突進してくると、城内に火災が起ったのを見て、勝ち目のないものと判断して、娘エイレーネを連れ、持てるだけの財宝を手にして逐電したのである。

このとき上掲の引用文では、皇帝は、ブーコレオン宮殿に皇女を取り残したことになる。ここでブーコレオン宮殿が登場するのは、いかにも突飛に思われる。この宮殿の陥落したのは、翌1204年の第二次コンスタンチノーブル攻略戦のときだったからである。詩人ランボーが史実を無視して、ここに由緒ある宮殿を登場させたのは、ラテン帝国初代皇帝フランドル伯ボードゥワンが戴冠式を挙げ、また第二代皇帝アンリがモンフェラット侯の娘アニェゼと結婚式を挙げたのが、この記念すべき建物であったので、極悪非道の皇帝アレクシオス三世が命欲しさに、ほとんど戦わずして首都を放棄した軟弱振りを強調するためであったと思われる。

また、あとに残された皇女というのは、皇女アレクシオス三世の妻エウプロシェネと三女で出戻りのエウドキアであった。エウドキアははじめセルビア王ステパノスのもとに嫁いでいたが、後にアレクシオス五世となるムルツプロス<sup>45)</sup>と再婚した。第二次コンスタンチノーブル攻略戦の折、彼女は母を連れ、夫とともに父アレクシオス三世を求めてトラキアへ逃亡するという、波瀾に富む一生を送った女性である。

アレクシオス三世が逃亡したあと、盲目の皇帝イサキオス二世が復位していたが、皇子アレクシオスも皇帝となってアレクシオス四世と称した。

アレクシオス四世は念願が達成されたことを大いに喜んだが、十字軍およびヴェネチア総督等と結んだ契約はいっこうに果たそうとしなかった。それどころか、皇帝は契約の破棄を宣言したのである。たまりかねた十字軍側は、詩人としても著名であったコノン・ド・ベチェュヌを使者に立てて、皇帝に宣戦布告することになった。

ここに、第二次コンスタンチノーブル攻略戦が勃発するのであるが、十字軍が宣戦布告したことを好機到来と思った皇帝の家臣ムルツプルスは、皇帝を捕えて殺害し、みずからアレクシオス五世と名乗ったのである。

十字軍側は、ムルツプロスの皇帝即位は、自分たちに対する公然たる挑戦であると見たが、一方、これを契機に十字軍のなかから皇帝を選ぶことを提唱していたヴェネチア側の主張が優位を占め、ここに、第二次コンスタンチノーブル攻略が決議されるのである。

1204年4月に行われたこの攻略戦の模様を、まず詩人ランボー・ド・ヴァケイラの書簡詩によって概観しよう。

「私は殿とともに、尊厳なるラスカリスとベトリヨン地区の有力者など、もろもろの権力者たちを包囲したのです」。<sup>46)</sup>

コンスタンチノーブル攻略戦で、十字軍にはげしく抵抗したものに、ラスカリス兄弟がいる。ここでいうラスカリスは、弟のテオドロス・ラスカリス<sup>47)</sup>と推定される。テオドロスはアレクシオス三世の娘を嫁<sup>めと</sup>ったことがあるが、アレクシオス三世が首都を逃亡したあと、ギリシャ人によって皇帝に推されている。彼はビザンツ帝国の正統の継承者であるため、新しく帝国の建設を企てる十字軍にとって、彼の存在は危険視された。そのことはヴィルアルドゥワンの『征服記』の随所に見られるが、詩人ランボーが書簡詩のなかで、特にラスカリスの個人名を挙げているのは、十字軍によってラテン帝国が建設されたのちも、彼がビザンツ帝国皇帝として勇名をとどろかせていたためと思われる。

第二次コンスタンチノーブル攻略戦は、十字軍と篡奪者アレクシオス五世ことムルツプロスとの戦いによって始められた。十字軍側は、攻略に手こずったが、巧妙な策略が功を奏したのと、城内での出火等によって、首都はもろくも陥落したのである。

皇帝アレクシオス五世は、すでに亡命中の義父アレクシオス三世のもとへ逃亡した。アレクシオス三世は女婿を一時優遇したが、仲違いの末、実兄イサキオス二世の場合同様、その目をくり抜いて小アジアへ追放した。これを知った十字軍は、盲目のアレクシオス五世を捕えてコンスタンチノーブルに連行し、高さ百メートルもあるテオドロスタから突き落した。ヴィルアルドゥワンは『征服記』のなかで、ムルツプロスは「あまりに高いところから落下したため、地面に達したときには、すでに全身はばらばらだった」<sup>48)</sup>と書き留めている。

さて、引用文で見たベトリヨン地区について、ひとこと付け加えたい。ベトリヨン地区というのは、首都コンスタンチノーブルの北隅の一带から、プラケルナエ宮殿に至る金角湾に臨む丘陵で、当時は教会や僧院が立ち並んでいた。しかし1203年にはヴェネチア人が単独で、また1204年にはヴェネチア人と十字軍の連合軍の海上から攻撃によって、大きな被害を受けたのである。

さて、詩人ランボーは、書簡詩のはじめの部分で、次のように歌っている。

「殿は冠を戴くことがなかった」。<sup>49)</sup>

これは主君モンフェラットが十字軍総帥であったのに、ラテン帝国が創設されたとき、皇帝に選出されなかったことを意味する。

1204年6月コンスタンチノーブルが二度目の攻略で陥落したとき、創設されたラテン帝国の皇帝に、紆余曲折の末、フランドル伯ボードゥワンが選ばれた。モンフェラット侯はもちろんのこと、侯に忠実な従僕ランボーにとっても全く予想できなかったハプニングであった。

ここで、皇帝選出の過程について見ると、選考は選挙人が十字軍側とヴェネチア側とから、それぞれ6名ずつ選ばれて行なわれた。

最後の投票の結果、予想に反してフランドル伯が皇帝に選ばれた。この選挙には、ヴェネチア総督ダンドロの裏工作があったように思われる。つまり、モンフェラット侯が皇帝に選ばれると、ヴェネチア共和国はモンフェラット侯および侯と姻戚関係のあるドイツ皇帝の双方から牽制される恐れがあること、一方、フランドル伯は若い上に、北海に臨む遠いかなたの国の出身であるため共和国との利害関係が稀薄であること。こうした理由から、フランドル伯ボードゥワンに軍配が上った模様である。

詩人ランボーはこの選考結果を、歯ざしりをしてくやしがり、諷刺詩「皇帝にもの申す」<sup>50)</sup>のなかで、まず選挙人の一人であったソワソンの司教ネヴロンを名指し、怒りをこめて、次のように歌っている。



「ネヴロンは弾劾されるでしょうし、また12人の選挙人も罵られるでしょう」<sup>51)</sup>。

新皇帝ボードゥワンは即位後ただちに、モンフェラット侯と犬猿の仲になった。理由の一つは、モンフェラット侯がすでに住民の要望もあって統治していたサロニカ地方を、皇帝が占拠しようとしたためである。それでも和解が成立して、モンフェラット侯はサロニカ王国の初代国王になることが、正式に承認された。したがって、モンフェラット侯は国王になることができたが、ついに皇帝の冠を戴くことはできなかったのである。

これについて付言すると、第四次十字軍に平騎士として参加した北フンスの年代記作者ロベール・ド・クラリは、その著『コンスタンチノーブルの征服史』のなかで、モンフェラット侯を国王と呼んでいるが、南フンス出身の詩人ペイル・ヴィダルは、次の詩句のなかで、主君の不運を悼んでいる。

「もし私の願いが叶えられて、殿が黄金の冠をお被りになられることを」<sup>52)</sup>。

ヴィダルの願いは、また詩人ランボーの念願でもあったのである。

次にランボーの手に成る痛烈な諷刺詩「皇帝に物申す」をもう一度取り上げたい。これは、コンスタンチノーブル攻略とラテン帝国創設当初、十字軍の内部に渦巻いていた不穏な空気を感じさせる。詩人はまず、フランドル伯が皇帝就任後、気に入らぬことばかりすると前置きし、はげしい口調で、皇帝に次のように進言している。第一に、十字軍士たちに期待どりの報酬を与えること。第二に、外敵に対して毅然たる態度で臨むこと。第三に、ビザンツ帝国の征服後も、エルサレムの解放という十字軍本来の目的は厳然と存在していること。第四に、皇帝のゆゆしい政策には、ヴィルアルドゥワンのような宮廷顧問たちにも責任があること。

ちなみにランボーはヴィルアルドゥワンに対して批判的であったが、南フランスの恋愛至上主義の文学の影響を多分に受けたコノン・ド・ベチューヌとは相性がよかったように思われる。コノン・ド・ベチューヌはヴィルアルドゥワン同様、十字軍では重要な戦略家として活躍し、ラテン帝国が創設されると、いち早く功労者として式部長官に昇進している。新人ランボーは、ラテン帝国創設の1204年夏、コノンと討論詩 (*partimen*) を作っている。討論詩というのは、南フランスに起源を持ち、二人の詩人が一つのテーマを、特に恋愛をめぐる対話、掛け合いの形式で展開するものである。ところでランボーとコノンの討論詩の特異な点は、それぞれが南仏語と北仏語を用いて恋愛談議をするという、他に類似的のものが無いところである。

ところでランボーは、諷刺詩のなかで、皇帝ボードゥワンを酷評しているが、そこに見る皇帝像は、一般の年代記作者のものとは、かなりかけ離れている。本来、諷刺詩 (*serventès*) というジャンルには若干の誇張は避けられないが、それは差し引いても、ランボーの恨みがましい言葉には、主君が皇帝選出に洩れたことに対する失望感によって増幅された部分もあると思われる。

すでに述べたように、詩人ランボーはモンフェラット侯のいわば腹心の友として、また卓越した騎士として、北イタリアの自由都市との抗争に介入したのをはじめとして、シチリア遠征やコンスタンチノーブル攻略戦に参加したが、二人はともども東方の土となり果てるのである。ここで、飽くことなく戦場を駆けめぐるこの二人の末路を粗描してみたい。

モンフェラット侯は皇帝にこそなれなかったが、サロニカ国王として領土拡大につとめ、ギリシア西部に向けて着々と遠征に手を延ばしていた。

同じ頃、ワラキア・ブリガリア連合軍が、破竹の勢いで南下しはじめていた。彼等は過去二世紀間、ビザンツ帝国の桎梏に苦しんでいたが、1180年皇帝マヌエル・コムネノスの死後、ようやく蠢動しはじ

めていた。1205年3月、ブルガリア王イワニツァ<sup>53)</sup>の率いるワラキア・ブルガリア連合軍が、アドリアノーブルにはげしく攻撃をしかけてきた。皇帝ボードゥワンは急速救援に出かけたが、この戦いで皇帝軍は惨敗を喫し、皇帝は捕虜となったのである。

同年8月、皇帝の獄死が確認され、弟のアンリ<sup>54)</sup>がラテン帝国第二代皇帝に就任し、翌1206年早々モンフェラット侯の娘アニェゼと結婚した。その年の夏、新皇帝はモンフェラット侯とマケドニアとトラキアとの境界に近いキプサラで会見している。ヴィルアルドゥワンの『征服記』には、次のように記されている。

「(モンフェラット)侯は使者をアンリのもとに送り、キプサラの町のちかくを流れる川のほとりで会談したいと申し入れた。…二人は夏が過ぎて10月に入ったら、双方軍勢をアドリアノーブルちかくの平原に結集し、打ちそろってイワニツァ王の討伐に赴くよう話し合った。こうして二人は、大いに満足し、喜びのうちに別れを告げ、侯はモシノポリスへ、皇帝アンリはコンスタンチノーブルへ向けて、それぞれ帰還した<sup>55)</sup>」。

宿敵イワニツァを無きものにするのも時間の問題と気をよくしていたモンフェラット侯は、サロニカ王国に帰る道すがら、モシノポリスにさしかかった時、近くのギリシア人たちの勧めで、モシノポリスに近いロドープ山中に入り込んだ。折から、土地のブルガリア人たちがモンフェラット侯の手勢の少ないのを見ると、たちまち四方八方から襲いかかってきて侯を殺害したのである。

ヴィルアルドゥワンによれば、その時、モンフェラット侯ボニファチオは首を搔ぐ切られ、首は土地の者によってブルガリア王イワニツァのもとに届けられた。イワニツァはその首を見ると、生涯最大の喜びだと欣喜雀躍したという。

ヴィルアルドゥワンはこの災禍に遭った人物として、モンフェラット侯の名を挙げ、そこで『征服記』の筆を折っている。しかし詩人ランボーもおそらく主君同様ロドープ山中ではかない最後を遂げたものと思われる。というのは、もし彼が生き延びていたとすれば、主君の死を悼んで、南フランスの詩人の好んで作った哀悼詩 (*planh*) の一編も作成しないはずがないからである。

モンフェラット侯の死後、その宮延に残った南フランス出身の詩人の数も少なくなかったと思われるが、そのうちの一人、エリア・ケレル<sup>56)</sup>は諷刺詩のなかで、北イタリアのモンフェラットにいる侯の息子グリエルモ四世に、ただちにサロニア王国へ赴いて、父君の仇を打つように勧めているのである。

最後に詩人ランボー・ド・ヴァケイラが、いかなる理由があって、書簡詩という特別なジャンルの詩を考案して、その作成に当たったかを、改めて考察してみたい。

ランボー<sup>ちぎょう</sup>が書簡詩を作成する前年の1204年5月、ラテン帝国が創設され、10月に代表的な功労者に領地の知行権が確認された。モンフェラット侯がサロニカ王国を正式に取得したのは、まさにこの時であった。翌年侯も家臣の論功行賞を行なうだろうという噂が流れた。それを知ったランボーは、自分が4分の1世紀の間、主君モンフェラット侯の側近として忠勤これつとめたのに、いざ論功行賞の段になると、自分よりも身分の高い者や、追従のたくみな者が現われて、自分がないがしろにされはしないかという疑念を抱いたようである。その時詩人の脳裡には、過去20年あまりの間、ひたすら主君の名誉のために粉骨砕身努力してきたことが、走馬燈のように去来したものと思われる。かつての宮廷詩人ランボーは、今こそ自分の詩才を発揮して、自らの勲功を誼いあげ、あらためて主君の認識を深めるべき時期が到来したものと、急いでペンを取ったように思われる。

こうした情勢のもとに、書簡詩は1205年の春モンフェラット侯が包囲していたペロポネソス半島東部

の港ナフプリオンか、サロニカ王国にあって、比較的平穏な時期を利用して作成し、それを主君に提示したもとのと思われる。

こうして完成されたものが、12・3世紀ロマンス文学のなかできわめてユニークな作品といわれる書簡詩なのである。

作品は10音節、単一脚韻の詩句214行から成り全体はそれぞれ脚韻の異なる三部に分れている。ランボーがこのような詩型を用いたのは、南仏文学のなかで最も人気のある、伝統的な詩型を踏襲することによって、主君モンフェラット侯に親近感を抱かせ、かつ彼の心を容易に感動させることのできるものと信じたからであると思われる。

そもそも南仏文学は、恋愛詩であれ、諷刺詩であれ、詩の内容から極力具象性を排除して、聴衆あるいは読者の情感に訴えるのが一般である。その点ランボーは、こうした伝統に捉われなかった一面、事実を忠実に記述する年代記作者の冷徹さには欠けるところもあった。

このように推論してくると、ランボーは論功行賞を有利に運ぶことだけを目的に書簡詩を手がけたかに見えるが、実はそれだけではなかった。ここで、書簡詩の一節を引用しよう。

「私は殿のお人柄を知りすぎるほどよく知っています。ですから私は、人の三倍の報酬が受けられるはずで<sup>57)</sup>。殿は間違いなくご存知です。私は殿の目撃者であり、騎士であり、詩人であることを。公爵さま」。

そして上の詩句は、次のように解釈できるのである。つまり自分こそは後世の人びとに先んじてモンフェラット侯の英雄的勲功と、高潔さを目撃した人物であり、侯の命を救ったすぐれた騎士であり、かつまた、自分はモンフェラット家とその輝しい代表者を賛美し、それを不朽なものにした詩人であると。そうした大義名分を果してきたからこそ、自分は「人の三倍の報酬を受ける権利がある」と主張するのであると。

書簡詩に見るランボーの切なる願いは、ついに主君の聴き入れるところとなった。書簡詩が作成されてから1・2か月後、おそらくサロニカ王国で作成されたと思われるランボー最後の諷刺詩「冬も夏も気に入らぬ<sup>58)</sup>」には、次のような語句が見られるからである。

「私は征服によって富を作りました…私の権勢が増大するにつれて<sup>59)</sup>」。

また南フランスの一伝記作者によると、モンフェラット侯は、「彼（ランボー）にサロニカ王国内のすばらしい土地と、高額な年金を与えた<sup>60)</sup>」ということである。

いずれにせよ詩人ランボーは、白鳥の歌ともいうべき最後の諷刺詩をさながら辞世の句として、次のように結んでいる。

「私たちによって、ダマスカスが襲撃され、エルサレムが征服され、シリア王国が解放されんことを<sup>61)</sup>」。

この上の二行の語句は、欲得に明け暮れたモンフェラット侯ボニファチオと、ヴェネチア総督エンリコ・ダンドロとによって、ザダール占拠、コンスタンチノーブル攻略を敢行せざるを得なかった、純真な十字軍たちの、良心の苛責に裏打ちされた、今は叶わぬ、はかない夢を物語るものと思えるのである。

## 注

1) Eugène Delacroix (1798–1863)。

- 2) *"L'Entrée des Croisés à Constantinople"*.
- 3) Baudouin IX de Flandre (1172–1205)。
- 4) 1855年5月26日付けと6月3日付けの〈祖国〉紙 *Le Pays* に掲載され、1868年『審美渉獵』*"Curiosités Esthétiques"* に再録された。
- 5) Innocentius III (1160–1198即位–1216)。グレゴリウス七世の教権統治政策を受けて、法王庁の強化および法王領の失地回復を決意。その一環として、ギリシア正教会に対する権威の伸張を計って第四次十字軍を、また南フランスに起ったアルビ派の異端を撲滅するためにアルビ派討伐十字軍 (1209–1229) を提唱。
- 6) Geoffroy de Villehardouin (v.1150–v.1213)。フランス語の散文をもってフランス最初の年代記『コンスタンチノーブルの征服記』*"La Conquête de Constantinople"* (v.1222) を書く。シャンパーニュ譜代の家臣。代々シャンパーニュの元帥。ヌイイの司祭フルクによって十字軍が唱道されると、いち早く主君シャンパーニュ伯チボー三世に十字軍参加を誓う。主君の死後、モンフェラット侯ボニファチオー一世が十字軍総帥になると、その幕僚の一人として活躍。
- 7) Robert de Clari (v.1185–v.1216)。アミヤン近郊の出身。領主ピエール・ダミヤンとともに第四次十字軍に平騎士として参加。従軍の見聞録『コンスタンチノーブルの征服史』*"Histoire de ceux qui conquièrent Constantinople"* を著わす。
- 8) Henri Valenciennes 生没年不詳。13世紀の年代記作者。ラテン帝国第二代皇帝アンリの伝記『コンスタンチノーブルの皇帝アンリ伝』*"Histoire de l'Empereur Henri de Constantinople"* を著わす。
- 9) Conon de Béthune (v.1150–1219)。第四次十字軍で重要な役割を果たした。十字軍に参加する以前は、シャトラン・ド・クーシー同様、宮廷恋愛詩人であった。
- 10) Châtelain de Coucy, Guy de Thourotte (v.1150–1203)。フランス最古の宮廷恋愛の詩人の一人。クーシーの城代。第四次十字軍に参加、遠征中に死亡。
- 11) Hugues de Berzé 13世紀初頭の恋愛詩人。1201年父ユークとともに第四次十字軍に参加。1216年に帰還。
- 12) Peire Vidal トゥールーズ出身の南仏吟遊詩人。12世紀末から13世紀初頭にかけて、スペイン、ラングドック、プロヴァンス、ドイツ、イタリアなどの宮廷を中心に活躍。また第四次十字軍にも参加するなど、波瀾に満ちた生涯を送る。現存する詩は40数編。恋愛詩、諷刺詩にすぐれた天分を発揮。
- 13) Gaucelm Faidit (v.1150–1220)。南西フランスのリムーザン出身の詩人。第三次十字軍に参加したらしい。第四次十字軍の折、総帥モンフェラット侯に先立って、1202年10月ヴェネチアを出発。ダルマチア地方の港市ザダルまで行ったことは明らかであるが、その後の足跡は不明。現存する詩65編。ランボー・ド・ヴァケイラ、ペイル・ヴィダルとともに、12世紀末のうち13世紀初頭にかけて輩出した詩人のうち、最も注目すべき詩人。
- 14) Bonifacio di Monferrato.
- 15) *"un paubre cavallier de Proensa, del castel de Vaqueiras, que avia nom Peirors, qu'era tengutz per mat "* (J.Boutière et A.H. Schutz: *"Biographies des Troubadours"*, 1973, P.447)。
- 16) Bertrand des Baux, duc d'Orange (1181死) 詩人としても有名であったオランジェ公ランボー三世の姉妹ティベルジェと結婚して、オランジュ公国を継承。ヴァケイラ城は、ベルトラン・デ・ボーの息子ギヨーム四世のとき、トゥールーズ伯レーモン六世の所有となる (1210)。13世紀の作と思われる、詩人ランボーの『伝記』によれば、詩人は1189年以前のごく短期間ギヨーム四世の宮廷に滞在していたとい

う。なおギヨーム四世は1182年オランジェ公となり、1215年には神聖ローマ皇帝フリードリッヒ二世によって、アルル・ヴィエンヌ王国を与えられた。しかし1218年、アルビ派十字軍に加担したことが民衆の不興を買い、アヴィニョンの住民に殺害された。

- 17) Alberto di Malaspina マラスピナ伯は12・3世紀トスカナ地方で栄えた一家。詩人ランボーは1190年から3年間、アルベルトの宮廷に滞在。その間詩人は、アルベルトとともに討論詩（*tenso*）を作成。Joseph Linskill: “*The Poems of the Troubadour Raimbaut de Vaqueiras*” (1964) に収録されている作品VIを参照。
- 18) (que) m'avez gent noyrit et adobat et fait gran be e de bas aut pojat , e de nien fait cavalier pregat .<sup>7 8 9</sup>
- 19) V. Crescini: “*Lettera Epica di Rambaldo di Vacqueiras*”, 1901.
- 20) E quant anetz per crozar a Sayss<sup>26</sup> . (以下に引用するランボー・ド・ヴァケイラの作品は、すべて注(17)に見るリンスキル版による)。
- 21) tant qe'il crozat de Frans'e de Campaigna<sup>5</sup> l'am quist a Dieu per lo meillor de totz per colrar lo sepulcr'e la crotz .<sup>7</sup>
- 22) Vas Montferrat, chansoneta te man<sup>44</sup> : E per melhor lo pot om ben eslire<sup>46</sup> (Joseph Anglade: “*Les Poésies de Peire Vidal*”, 1923).
- 23) per q'ieu am mais, s'a lui ven a plazer<sup>53</sup>, de lai morir que sai vius remagna .<sup>54</sup>
- 24) per cui fatz sos e motz<sup>73</sup>, non sai si m lais per vos om leu la crotz, ni sai cum an ni sai comen remaigna .<sup>74 75</sup>
- 25) Ara nos sia guitz' lo vers Dieus Jhesus Cristz<sup>2</sup>, lais de bella paria<sup>11</sup>, dans planc e languis<sup>15</sup> e sospir nuoig e dia !<sup>16</sup> (Jean Mouzat: “*Les Poèmes de Gaucelm Faidit*,” 1965).
- 26) Por li m'en vois souspirant en Surié<sup>1</sup>, Quar nus ne doit faillir son Creatour<sup>2</sup> (A.Wallensköld: “*Les Chansons de Conon de Béthune*”, 1921).
- 27) Guiraud de Borneil 西南フランス・ドルドーニュ地方出身の吟遊詩人。1190年～1240年ころ活躍。80編余りの叙情詩が残っている。「吟遊詩人の師」と仰がれた。
- 28) si prist congié por raler en son país et por atornar son afaire...que il seroit encontre als en Venise (44) (Edmond Faral: “*Villehardouin—La Conquête de Constantinople*”. Tom, I, Les Belles Lettres, 1973).
- 29) Philipp von Schwaben (1180頃—1198即位—1208)。フリードリッヒ赤髭王の末子。ビザンツ皇帝イサキオス二世の娘イレネの夫。小ドイツ主義を唱えるオットーを推す法王インノケンティウス三世により破門される。
- 30) Alexios II, (1155—1204, 在位1185—1195, 1203—1204)。
- 31) Alexios IV, (1182—1204, 在位1203—1204)。
- 32) Alexios III, (1210死, 在位1195—1203)。
- 33) maint autre qui eschiverent le passage de Venise por le grant peril qui i ere e s'en alerent a Marseille (50).
- 34) Enrico Dandolo (v.1155—1204)。
- 35) Zadar 現在ユーゴスラビア領。
- 36) 61章。
- 37) li marchis de Monferat, qui ere remès arriere por affaire que il avoit (79).
- 38) (E Mon Thesaur) que lais en Lombardia<sup>52</sup>, don Dieu salut, car de totz nos es guitz<sup>53</sup>, e dels crozatz los cors e'ls esperitz<sup>54</sup> . (58).

- 39) *e era pres lo fort castel Babo* <sup>30</sup> (II).
- 40) Jean de Nèle フランドル伯の配下にあったファルヴィの貴族。
- 41) Methônê, Methóni, Mondon ベロポネソス半島先端に近い港市。
- 42) *Pueys vinc ab vos guereyar part Monç* <sup>32</sup> (II).
- 43) *E estey tan armatz pres del donjo ...l'emperador ...selh que destruyt son frair'a trassio* <sup>38 39 40</sup> (II).
- 44) *E l'empeaire fugic s'en a lasset nos palays Bocaleo e sa filha ab la clara faisso* <sup>56 57 58</sup> (II).
- 45) Murzuphlos.本名アレクシオス・デュカス。
- 46) *el sevasto Lasquar el proestrat el Pehitr'assis, e maint'autra postat* <sup>34 35</sup> (I).
- 47) Theodoros Lascaris (1177–1222, 在位1204–22), ニカエアにビザンツ帝国を建設。
- 48) *et chaide si halt que, quant il vint a terre, que il fut tout es miez* (307).
- 49) *ses corona* <sup>4</sup> (1).
- 50) “Conseil don l'emperador” (XX).
- 51) *et er n'encolpatz Nevelos e l doz'electors blasmaran* <sup>56 57</sup> (X X).
- 52) *E s'aissi fos com eu volh ni devis, Corona d'aur li vir'el cap assire* <sup>49 50</sup> (XLI).
- 53) Johannis, Johannizza (在位1204–1206)。ブルガリア王。イサキオス二世とワラキア人との戦闘中、人質としてコンスタンチノーブルに幽閉される。後に十字軍と共同でビザンツ帝国攻略を企てたが拒絶されたため、十字軍を敵視した。
- 54) Henri de Flandre (1168–即位1206–1216)。
- 55) *Lors prist ses messages, si les envoia a l'empeor Henri, et li manda que il parleroit a lui sor le flum qui cort la capesale...* (495). *Et en prissent un parlement que il seroient a l'insue del mois doctubre a tot lor pooir en la cité d'Andrenople por hostoier sor le roi de Balquie. Et ensi departirent mult liê et mult haitié. Li marchis s'en ala a Messinople, et l'empereres Henris vers Constantinople* (497).
- 56) Elias Cairel 南西フランス・ペリコール地方出身の叙情詩人。『伝記』によれば、彼は「歌うのが下手で、作詩するのが下手で、ヴィオールを奏でるのが下手で、話するのはもっと下手であったが、歌詞とメロディーを記するのがたいへん上手だった。そしてロマニアに長く滞在した」。Mal cantava e mal trobava e mal violava e peichs parlava, e ben escriva motz e sons En Romania estet lonc temps. 彼はロマニア、すなわちラテン帝国に1204年から1210年頃まで滞在したらしい。小文で取り上げている諷刺詩は、1207年末から1208年初めに作られた。その中で詩人は「(侯は) サロニカ王国を投石機も攻城砲を用いなくとも征服できましよう」Lo regime de Salonic <sup>33</sup> sens peireir'e ses manganel <sup>34</sup> (230). (Martín de Riquer, “Los Trovadors, Historia literaria y textos,” Tome III, 1975) という。
- 57) *E pus senher sai tan de vostr'afar per tres dels autres mi devetz de be fât et es tres razos qu'en mi podetz trobar testimoni, cavalier e joglar, senher marqnes* <sup>115 116 117 118 119</sup> (III).
- 58) “No m'agrad'iverns ni pascors” (XXII).
- 59) *don sui conqueren enriquitz; ai major ir'ab mi mezeis* <sup>III. 33 IV. 41</sup>.
- 60) *E det li gran terra e gran renda el regime de Salonic* <sup>94</sup>.
- 61) *Per nos er Domas envazitz, e Jerusalem conqueritz el regnes de Suri'estortz* <sup>85 86 87</sup>.

## 年 表

- 1150ころ ジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥワン生まれる。
- 1152ころ 1)モンフェラット侯ボニファチオ生まれる。2)ランボー・ド・ヴァケイラ生まれる。
- 1198 1月 ローマ法王イノケンティウス三世即位。8月 法王第四次十字軍宣布。
- 1199 シャンパーニュ伯チボー十字軍総帥に押される。
- 1201 3月末～4月 ヴェネチアと船舶貸与の契約。5月末 シャンパーニュ伯病死。8月末 モンフェラット侯、北仏のソワソンで十字軍総帥に就任。十字軍のエジプト経由決定。8月～9月 ランボー・ド・ヴァケイラ「十字軍の歌」(XIX) 作成。9月 ビザンツ皇帝の皇子アレクシオス亡命。年末 皇子アレクシオス、姉の嫁ぐドイツ皇帝フィリップを訪問。折からモンフェラット侯および皇帝フィリップに会い、三者で十字軍の進路変更を協議した模様。
- 1202 十字軍ヴェネチア集結。多数の離脱者、資金不足。9月 ヴェネチア総督エンリコ・ダンドロ十字軍参加の決意。10月初旬 予定より3か月遅れて十字軍マルセイユ出航。11月末 港市ザダール占拠。12月下旬 ドイツ皇帝の使者来訪。イサキオス二世の復位と交換に莫大な財政援助を申し出る。十字軍士はげしく動揺。
- 1203 4月下旬 十字軍ザダール出航開始。皇子アレクシオス到着。5月下旬 コルフ島出航。6月23日～7月18日 第一次コンスタンチノーブル攻略戦。6月23日 聖ステファノス到着。6月26日 プラケルナエ宮殿包囲。7月17日 首都炎上、帝位篡奪者アレクシオス三世逃亡、皇帝イサキオス四世となる。8月1日 皇子、皇帝となりアレクシオス四世と称する。8月下旬 皇帝、モンフェラット侯等と帝国内平定に出発。首都内のギリシア人とラテン人争う。首都再度炎上。11月上旬 皇帝とモンフェラット侯等帰還。皇帝、十字軍との協定破棄。十字軍士、コノン・ド・ベチューヌを使者に立てて皇帝に宣戦布告。
- 1204 1月下旬 ギリシア人、ニコラス・カナボスを皇帝に擁立。皇帝アレクシオス四世、十字軍士に救援を求める。皇帝、奸臣ムルツプロスに捕えられる。ムルツプロス皇帝となり、アレクシオス五世と称する。2月上旬 アレクシオス五世、アレクシオス四世を絞殺。3月 十字軍士等ビザンツ帝国分割を協議。4月中旬 十字軍首都占領。ムルツプロス逃亡。首都三度目の炎上。ギリシア人テオドロス・ラスカリスを皇帝に擁立。皇帝小アジアのニカエアへ移る。4月下旬 十字軍士、首都略奪。ペトリヨン塔破壊。5月9日 フランドル伯ボードゥワン、ラテン帝国皇帝に推挙される。5月16日 皇帝戴冠式。ランボー・ド・ヴァケイラ、主君が皇帝に選出されなかったことに憤懣。6月～7月 詩人ランボー、首都で諷刺詩「皇帝に物申す」(XX)を作成。夏 詩人ランボー、コノン・ド・ベチューヌと討論詩(XXI)を作成。皇帝とモンフェラット侯、領土問題をめぐって不和。その後和解。9月 モンフェラット侯、サロニア国王に就任。年末 法王、コンスタンチノーブル攻略を称賛。
- 1205 2月初旬 ギリシア人、ワラキア・ブルガリア王イワニツァと結び、皇帝領デモチカとヴェネチア共和国領アドリアノーブルで反乱。3月末 皇帝ボードゥワンとブロワ伯ルイ、アドリアノーブル攻撃。4月14日 皇帝軍、コミ族と結ぶイワニツァ王に敗れる。皇帝ボードゥワン捕虜、ブロワ伯ルイ戦死。4月中旬 皇帝ボードゥワンの弟アンリ、摂政に就任。春 詩人ランボー、主君の包囲するペロポネソス湾内の港市ナウブリア近郊、あるいは主君の所領サロニカ王国の首都での比較的稳定な生活を送っている間に書簡詩を作成。5月末 ブルガリア王イワニツァ、サロニカへ向か

う。モンフェラット侯サロニカに帰還。**5月末** エンリコ・ダンドロ死亡。**6月～7月** 詩人ランボー、諷刺詩（X X I I）を作成。

**1206 2月～4月** イワニツァ王、前年5月に引き続きギリシア東部トラキア地方へ侵入。**6月** イワニツァ王、皇帝領デモチカ包囲。摂政アンリ、アドリアノーブル救援。**7月** 皇帝ボードゥワン獄死。**8月20日** アンリ、皇帝に即位。**9月～10月** イワニツァ王、またもトラキア地方に侵入、デモチカ包囲。

**1207 2月** 皇帝アンリ、モンフェラット侯の娘アニュゼとブークレオン宮殿で婚儀。**8月** 皇帝とモンフェラット侯と会談。**10月** にアドリアノーブル近郊でイワニツァ王討伐を約束。**9月4日** モンフェラット侯、サロニア王国への帰途、モシノポリスに近いロドーブ山中で、ワラキア・ブルガリア人に強襲にあい殺害される。詩人ランボーも主君同様殺害されたものと思われる。**10月8日** イワニツァ王、サロニカでコミ族の首長に殺される。

## 主 要 参 考 文 献

Joseph Linskill: "The Poems of the Troubadour Raimbaut de Vaqueiras", 1964, Mouton & co. The Hague.

Vincenzo Crescini: "Lettera Epica di Rambaldo di Vaqueira", 1901-2, atti e Memorie della R. Acc. in Padova.

Edmond Faral: "Villehardouin, la Conquête de Constantinople", Tom. I. II, 1973, Société d'Édition "Les Belles Lettres".

伊藤敏樹訳・注『コンスタンチノーブル征服記』—第四次十字軍, ジョフロワ・ド・ヴィルアルドゥワン, 1988, 筑摩書房。

J. Dufournet: "Villehardouin et Clari", 1973, Société d'Enseignement Supérieur.

Philippe Lauer: "Robert de Clari, la Conquête de Constantinople", 1974, Champion.

Sir Frank Marzials: "Memoirs of the Crusades, by Villehardouin & de Joinville", 1915, Everyman's Library.

Joseph Anglade: "Les Poésies de Peire Vidal", 1923, Champion.

Jean Mouzat: "Les Poésies de Gaucelm Faidit", 1965, Nizet.

Martin de Riquer: "Los Trovadors, historia literaria y textos". Tom. II. 1975. Editorial Planeta.